

ライトノベルにおける物語の技法（二）

——悪役令嬢の対するもの——

高瀬 真理子

抄録

ライトノベルというジャンルにおける作品の大衆化の中で、これらが主に電子出版として伸張し、ウェブのレベルから読まれるのはなぜか。また、イラスト、コミカライズ、アニメ化、ドラマ化、さらには映画化にまで発展するだけの力のある作品も出始めており、これらの作品の持つ意義を「悪役令嬢もの」に絞って抽出する。その背後には、現代が抱える時代背景と現代の世界や社会が抱える課題からの影響が考えられる。

キーワード

悪役令嬢、聖女、高位貴族、王族、男爵令嬢、子爵令嬢、婚約破棄、国外追放、毒殺、感染症、転生者、反逆者、シナリオ補正〔現実とゲームの差異〕、イベント、シンデレラストーリー、キャラクター設定

一、はじめに

拙稿「ライトノベルにおける物語の技法（一）」^{注1}（二〇二一年三月）では、コロナ禍での電子出版の活況と作品の大衆化の状況を述べた上で、悪役令嬢というテンプレートについて述べた。つまり、

おのれの権威を笠に着てヒロインをいじめ、最後にヒロインに心移したヒーローに断罪されるという型（フォーム）をどのように踏襲するか、あるいは、どのように意表を突くのか工夫することでライトノベルとしての物語のバリエーションを広げてきた。悪役令嬢とは、基本的に婚約者を奪おうとする者に挑まれる存在である。

本稿では、（一）で十分に論ずることのできなかつた課題について述べるとともに、身分が低いヒロインの下剋上だけではなく、「聖女」と呼ばれるタイプのヒロインにも着眼したい。また、悪役令嬢ものは、現在進行形で続々と新刊や続巻が出版されている。従って、まずは、二〇二一年段階よりどのように進化したか、レビュー上位のめばしい作品を表にまとめた。^{注2}（次頁参照）

二、一覧表からの概観

次頁表内の1「アルバート家の令嬢は没落をご希望です」（以下、「アルバート家」と略称する）は、ヒロインの登場にあつさりその場を譲って没落を希望するメアリを軸にした話である。メアリは「ドキドキラブ学園」恋する乙女と思いい出の王子」というゲームの世界に転生した転生者であり、カレリア学園内でこれから何が起るのか、ゲームで言うところの攻略本のストーリー、現実社会で言

作品名	作者名	発売日 A	発売日 B	文庫名	巻数	備考
1 アルバート家の令嬢は没落をご所望です	さき	2015.04.	2020.12.	角川ビーンズ文庫	8巻	C
2 悪役令嬢、時々本気、のち聖女。	もり	2015.07.	2016.07.	PASH！ブックス	3巻	C
3 公爵令嬢の嗜み	澪亜	2015.11.	2018.12.	カドカワ Books	8巻	C スピノフ 内包
4 転生したけど王子は諦めようと思う	鬼頭香月	2016.01.		アイリス NEO	1巻	
5 虫かぶり姫	由唯	2016.07.	2022.10.	アイリス NEO	7巻	C
6 悪役令嬢は隣国の王太子に溺愛される	ぶにちゃん	2016.11.	2022.03.	ビーズログ文庫	13巻	C
7 悪役令嬢なのでラスボスを飼ってみました	永瀬さらさ	2017.09.	2022.12.	角川ビーンズ文庫	11巻	C
8 自称悪役令嬢な婚約者の観察記録。	しき	2017.04.	2017.08.	レジーナブックス	2巻	C
9 悪役令嬢レベル99～私は裏ボスですが魔王ではありません～	七夕さとり	2019.05.	2022.06.	カドカワ Books	5巻	C
10 悪役令嬢になんかなりません。私は『普通』の公爵令嬢です！	明	2019.09.	2023.01.	カドカワ Books	11巻	C
11 婚約破棄のために淑女になる方法	もり	2019.11.		PASH！ブックス	1巻	2のスピ ンオフ
12 悪役令嬢、プラコンにジョブチェンジします	浜千鳥	2019.11.	2022.09.	角川ビーンズ文庫	6巻	
13 悪役令嬢の結婚後 もふもふ好き令嬢は平穩に暮らしたい	青蔵千草	2019.12.		レジーナブックス	1巻	
14 転生悪役令嬢は推しのハビエンを所望す！	藍上イオタ	2019.12.		アイリス NEO	1巻	
15 悪役令嬢の怠惰な溜め息	篠原皐月	2019.12.	2020.12.	電撃の新文芸	3巻	C
16 メイデー転生物語 この世界で一番悪い魔女	友麻碧	2020.03.	2021.11.	富士見L文庫	5巻	C
17 やり直し令嬢は竜帝陛下を攻略中	永瀬さらさ	2020.03.	2022.09.	角川ビーンズ文庫	5巻	C
18 僕は婚約破棄なんてしませんからね	ジュピタースタジオ	2020.04.	2021.09.	一迅社ノベルス	3巻	C
19 異世界から聖女が来るようなので、邪魔者は消えようと思います	進水 涼	2020.07.	2022.09.	角川ビーンズ文庫	5巻	C
20 弱気MAX令嬢なのに、 辣腕婚約者様の賭けに乗ってしまった	小田ヒロ	2020.08.	2022.12.	ビーズログ文庫	5巻	C
21 悪役令嬢は二度目の人生を従者に捧げたい	紅城蒼	2020.09.		ビーズログ文庫	1巻	
22 悪役令嬢のおかあさま	ミズメ	2020.10.		レジーナブックス	1巻	
23 悪役令嬢は断罪引退を目指したい！ けど、もしかしてここ溺愛ルート！？	せらひなこ	2020.09.		ティアラ文庫	1巻	
24 悪役令嬢は今日も華麗に暗躍する 追放後も推しのために悪党として支援します！	道草家守	2020.11.	2021.05.	カドカワ Books	2巻	
25 私が聖女？いいえ、悪役令嬢です！～生存ルート 目指したらなぜか聖女になってしまいうような件～	藍上イオタ	2020.11.	2021.05.	ベリーズ ファンタジー	2巻	
26 悪役令嬢は『萌え』を浴びるほど摂取したい！	烏丸紫明	2020.12.	2021.09.	ビーズログ文庫	2巻	
27 ベタ惚れの婚約者が悪役令嬢にされそうなので、 ヒロイン側にはそれ相応の報いを受けてもらう	杓子ねこ	2020.12.	2022.05.	マックガーデン ノベルス	3巻	C
28 悪役令嬢は推しが尊すぎて今日も幸せ	ぶにちゃん	2021.01.	2022.03.	ビーズログ文庫	2巻	6のスピ ンオフ
29 悪役令嬢だそうですが、攻略対象その5以外は 興味ありません	千 遊雲	2021.01.	2022.11.	レジーナブックス	2巻	C
30 悪役令嬢は溺愛ルートに入りました！?	十夜	2021.02.	2022.09.	デジタル版 SQEX ノベル	4巻	C
31 悪役令嬢はナイチンゲールをめざす	山田すずか	2021.05.	2022.02.	ビーズログ文庫	2巻	C
32 転成したら悪役令嬢だったので引きニートに なります	藤森フクロウ	2021.05.	2022.08.	アイリス NEO	3巻	C
33 自称悪役令嬢な妻の観察記録。	しき	2022.04.	2022.10.	レジーナブックス	2巻	C 8の続編

Cはコミカライズ有。発売日Aは1巻目の発売年月、Bは2023年1月30日時点での最新巻発売年月。

えば、予言のようなこの先の成り行きをすべて承知している。多くの悪役令嬢ものはこのように現代日本からゲームの世界に転生して、ゲームではない現実と実際に向き合っており、悪戦苦闘するストーリー展開が多い。

「アルバート家」においても、メアリは自分に忠実に使える美貌の従者アディに恋し、ヒロインにもなつかれ、周囲の人々は仲間になって、事件を乗り越えていく。このように貴族の令嬢が王太子や高位貴族ではなく、従者を恋愛対象とするものには、21「悪役令嬢は二度目の人生を従者に捧げたい」や「悪役令嬢は推しが尊すぎて今日も幸せ」などに見ることができる。

尤も、28「悪役令嬢は推しが尊すぎて今日も幸せ」は、6「悪役令嬢は隣国の王太子に溺愛される」を本編としている。こちらは、ラピスラズリ王国の王太子は、ヒロインであるアカリに恋してティアラローズに婚約破棄を突きつけるが、留学中だった隣国の王太子、アクアステイードに求婚されてマリソフォレストに移る。ところが、マリソフォレストのヒロインとしては、アイシラがおり、悪役令嬢としてのオリヴィアもいる。ティアアラローズがアクアステイードと結ばれることよって、いわゆるシナリオが変わり、ゲーム補正は、運命のように発生するが、それら乗り越えていく別のストーリー展開となる。その中で、「鼻血が出やすい」続編の悪役令嬢オリヴィアは、秀逸に尽くす従者レヴィを恋うている。これらの悪役令嬢は、人柄もよく、ヒロインとも敵対しない。設定は階級社会だが、個人を重視するが故に、従者といえども優れている。恋愛の対象として見ている。本編の方は、すでに13巻も出版され、コミカライズ化も進んでおり、妖精の登場シーンなどは、コミックの方が愛らしい。ライトノベルは、イラストのイメージは大

切にして、活字からそれぞれが想像するという作業もない。つまり、イラストが読者の好みに合わないレビュウで評価される。「悪役令嬢は隣国の王太子に溺愛される」は、さまざまな事件が用意され、シリーズものとして定着している。

さまざまな技法で描かれるライトノベルだが、技法の一つに「焦らし」がある。例えば、3「侯爵令嬢の嗜み」においては、第一王子アルフレッドが、第二王子派の躍進のために留学と称して姿を隠し、身をやつてディーンという名前でアルメリア公爵領に姿を現し、アイリスの画期的な領運営を支え、アイリスと愛情を育むが、最後は、国のために闘い、一端は第一王子死亡の報が流れる。

ディーンを愛していたアイリスは非常に悲しみ、その中で第一王子であるレティシアが女王として即位する。その後、実は第一王子は生きていて、突然、ディーンとしてアイリスのところに姿を現し、平民として侯爵令嬢アイリスと結婚するという結末を見るのである。ディーンが存在を「焦らす」ことで、アイリスと結ばれる大団円を盛り上げようとしたのだろうが、王族の男性が生きていると女王が存在しにくいと思っただろうか、あまりにご都合主義且つ、身分制すらそれで壊しているように見せている。しかし、作品世界の現実においては、王国であり、女王が君臨し、アイリスの弟ベルンが王配に選ばれている。ならば、ただでさえ、独立できるほどの力を蓄えたアルメリア公爵領を国が野放しにしているのだろうか。王配だけでは抑えきれないかもしれない。女侯爵として生きるであろうアイリスに対して、戸籍すら作った国であれば、第一王子の生存を認め、アルメリア公爵領を確実に王国内に封ずるために、ディーンが、アルフレッド第一王子として降嫁ならぬ臣籍降下として王家から婿入りすべきであったのではないか。その際、父親は隠

居となるだろうが、それが作品世界における政治的で現実的な結末だと思いが、身分制度を使いながら、王家且つ血脈を守らなければならぬ王族を簡単に平民に据えてしまうところにこの作品の限界を見る。

「焦らし」については、「虫かぶり姫」におけるクリストファー王子婚約者、エリアーナ・ベルンシュタイン侯爵令嬢の「生死不明」とそれに続く苦難、王家の離反者に命を狙われ、王妃の兄公爵のクーデターにまでおよんで作品世界の緊張が続く。クーデターを未遂で終わらせ、エリアーナが復権するまで、読者も作品世界の緊張とともに手に汗握らせる結果となっている。

三、虫かぶり姫——聖女フォームという型

「ライトノベルにおける物語の技法（一）」において、クリストファー王子の婚約者であるエリアーナ・ベルンシュタイン侯爵令嬢が生死不明でしばらく続巻が出ずになかなかストーリーに進展のなかった作品、理由は、「灰色の悪夢」という感染症の設定が「コロナ」の蔓延と重なり、著者が意図せぬ出来事にたじろいだ部分があったからと著者が六巻のあとがきで明かしている。五巻の発刊が二〇一九年七月で、六巻が二〇二二年二月の刊行であることを考えれば、その間の逡巡がうかがわれる。それ以外にも、王都に残って執務を続けるクリストファーの近辺で起きる事件と度々王家に見放されたと思われるラルシェン伯爵領に向いている婚約者のエリアーナの周囲で起こる事件と、その総体はひとつの流れでも個々に日々事件は起こり、王太子とエリアーナそれぞれの葛藤まで丹念に描き込んでいけば、物語はある決着を見るまで、なかなか進まない。従って、六巻でそれぞれに解決を見てその背後関係まで見渡せ

るようになるまでには、著者にも苦悶があったと推測される。

六巻において丁寧にも乗り越えたいらしいことが分かるが、ファンタジーの体裁をとりながらも現代の時代層を確実に捉えている。二人はそれぞれに国を統治する者として成長するが、感染症と戦乱の危機は、今日の社会がまさに抱えている問題であるからだ。そこに絡むのが、前回指摘したパスカル子爵令嬢をヒロインと見立てた悪役令嬢ものの型を用いた反逆事件であるが、著者はそれくらいの試練でこの二人を成婚には向かわせない。次には、これに学んだ王妃の兄であるオーディン公爵による、娘ファミリーアを使つて外祖父になることを企み、あろうことか軍部が力を持つことを是とする派閥が、王太子の隣に「聖女」と呼ばれるようになったファミリーアを据え、エリアーナと国家財政を立て直したベルンシュタイン侯爵家の失脚を企んでいくという流れである。

聡明で本の虫であるエリアーナは、その昔、才走つた生意気に育っている少年クリストファー王子が、ストレスから無自覚に本に当たると見咎め、身分差・年齢差を果敢に乗り越えて叱責する。反論もかなわず、衝撃を受けたクリストファーは、根が英邁であるだけにエリアーナに興味を引かれた。その王太子に応えてエリアーナは、幅広い読書から現実生活の改善や民の暮らしに寄り添うことを語るが、その読書と現実生活が結びつけられるエリアーナの姿に感銘を受けたクリストファーは、それが現実政治や行政の手腕によって実現する様を見せて報いていく。それらはクリストファーの手腕にもなる。初恋に目覚めたクリストファーがエリアーナの思いを統治の形にしてくれることへの感謝から、遅れて目覚めたエリアーナの恋は、一度パスカル令嬢によって脅かされ、エリアーナは初めて嫉妬と恋心を自覚する。

成婚の日取りも決まって盤石な関係の二人に否応なく突きつけてくるのが伯父でもあるオーディン公爵の野心である。「聖女」という設定は、爵位の低い令嬢が高位貴族や王族を射止めるシンデレラストーリーとは、また少し違った趣がある。それは、あくまでも階級社会である貴族の生活の中で、爵位の低い者が侯爵家以上の配偶者を射止めるということは、それが故の魅力があることはさておき、階級社会の意図する常識を揺さぶるものである。その点、「聖女」は、階級にこだわらない。「虫かぶり姫」では公爵令嬢だが、平民でも貴族階級でもかまわないものである。ある意味「聖女」と呼ばれるだけの「実力」で敬意と共に王族や高位貴族と並べるところに魅力がある。パスカル子爵とその娘の事件は失敗に終わったが、それを知ったオーディン公爵は、未だクリストファーに未練のあるファミリーに「聖女」と呼ばれるように仕向け、自分の派閥を使って、徐々にクーデターを起こそうとするのである。

一見、ベルンシュタイン家は平和穏健派に見えるが、黒翼騎士団のセオデン・バクラ將軍によれば、「サウズリンズの頭脳」という呼び名は、国家の危機に際して、軍師として求められることから発している隠し名だという。実際、エリアーナの祖父エドゥアルドの戦略を用いて国を勝利に導いて、英雄の名で呼ばれるバクラ將軍ならではの見解である。それ故、平和維持には向かないのだとも述べ、その座をファミリーに譲るようエリアーナに迫る。

エリアーナとクリストファー王太子の関係は、クリストファーの初恋に端を発し、困難を極めながら成就した恋愛感情に成り立つ関係である。恋愛感情は己の自我と密接に絡み、しかも相愛であるだけに諦めることはさらに難しい。セオデンおじいさまと慕うバクラ將軍の言ではあっても、エリアーナは、どれほどの困難を身に負う

て苦勞しても、任務を全うし、生きて、王太子クリストファーのもとへ帰る道を選ぶ。

襲撃の混乱の中で、それでもエリアーナは、王太子クリストファーへの思いを捨てず、王太子側近アレクセイへ密かに連絡を取り、王太子婚約者としてとるべき行動を開始する。暴動を起こしたラルシェンの街も、鉱山夫たちの立て籠もるウルマ鉱山の町ハルシェンも、そして、「灰色の悪夢」と呼ばれる感染症治療薬を見つけたことも諦めず、知恵を絞り、地元民たちの生活に寄り添う発想とそれを実現化する手立てを考案しながら、場合によっては、緊急性の観点から超法規的に事を起こし、民を救済しながら新たな秩序と生活を提案していく。王都では、聖女ファミリーこそが次期王太子妃との声高く、エリアーナは逃げたのだなどという不名誉な噂が蔓延する中、エリアーナは、暴動を起こした首謀者、アッカ・アルクトを罰することなく、新たな秩序を作るためのリーダーとして働かせる。王家に見捨てられ、追い詰められて起きた暴動であるならば、クリストファーから委任された王家の代理として、この地の病を鎮め、新しい生活を創造して、領主とともにその地が安定することを見越すべきだという合理的な思考からである。

治療薬を探すのに妨害にも遭うが、薬草学の権威であったアルケミル博士の曾孫、ジーンと出会い、エリアーナは、ともに知恵を出し合って、治療薬を完成させていく。己の名誉などより、民の生活という為政者としてのあり方を疑わずに示せる資質にも恵まれている。民に寄り添う王太子婚約者と理解されることで、民がエリアーナの味方になる。エリアーナは、王太子クリストファーに知恵を授けて守られていた存在から、自ら民に語りかけ、民との交流の中から新たな施策を整えていく次期王妃としての実力を、これらの困難

の中で自覚なく養って行くのである。

一方、王太子クリストファーも、エリアーナの陥った事態に苦悶を隠せない。しかも敵が、伯父であるオーデイン公爵であるとなつていけば、根底から覆されるような厳しい事態である。最愛のエリアーナを危険にさらしていることをおのれに許せずにいる。そういう中でエリアーナの父ベルンシュタイン侯爵は、王太子に向けて、次のように言い放つ。

「王子、あなたはこれまで何を学んで来られた。愚王の道を踏襲するためか。繰り返す歴史におのれの未熟さを悔いて、ただ我らの名に頼り続けるためか。それがあなたの選んだ王の道か」

さらに侯爵は、幼少期からこの王太子をあしらってきた辛辣さで続ける。

「私と祖父^{ママ}が出した条件を上っ面で取り付け、事を急いだゆえのしっぺ返しと言いましょか。青臭いひよつこのやることゆえ、予測し得る事態と言ふべきでしょうか^{ホキ}」

その上で、侯爵は静かな微笑とともに王太子へ次のように言い、クリストファーの苦悶の上塗りをするのだが、エリアーナはこのような父を持つ娘だということは、おさえておきたい。

「あなたが出した答えには敬意を払いましょう。クリストファー殿下」

それはめずらしく侯爵がクリスを認めたのだと、続いた言葉で

悟る。

「あなたの求め続けたエリアーナ。あの子に手掛かりを託すと決めた、あなたの判断を」

その瞬間ほどクリスの感情がふくれ上がったことはなかったかも知れない。それは認められた喜びなどではもちろんなく、自身への激しい怒りだった。

近衛大將軍であるアイゼナツハ家の子息で王太子側近であるグレンから見ても、その厳しさに瞠目する思いであつたことが分かる。

これがサウズリンズの頭脳と呼ばれる一族か、と今さら戦慄を覚える。時勢と未来を見て、それが最善と思えば、自身の娘でさえ危地に向かわせるのにためらいはない。その冷徹な判断力」

これらの会話の流れを見れば、当然、父侯爵は、王太子に要求を突きつけながらも、娘が書物よりも王太子に心を惹かれたならば、起こることは見通していたであろう。また、エリアーナ自身がその資質を開花させるべく、困難に立ち向かわざるを得ないことも。ベルンシュタイン侯爵家は、自らの手の者たちである「ダン・エドルド」をエリアーナに差し向けて、必要な物資を国中から集めて援護した。その中には、エリアーナの叔父アンドリュースら含まれていた。一族が皆本の虫であること以外には、政治的なことにも興味は薄く、ひっそりしているが故に、この侯爵家は、高位貴族にしては侮られることが多いが、一族が真価を発揮し、総力をあげて背後からエリアーナを支援したことが分かる。

クリストファーも能力を見込んだ個人的な部下であるアランを、

常にエリアーナに付けているし、マルドゥラ国の第五王子でサウズリンド人とのハーフであるアーヴィンも同行してエリアーナに言い寄る場面もあるが、エリアーナは、内心揺さぶられつつも、アンリエッタ王妃やロザリア王姉からの教えを糧に、揺るぎなくあしらい方を覚えていく。また、王家の陰に発生した離反の指示命令の中で、裏切り者になったエリアーナの従者ジャンに詰め寄り、自分の従者として取り戻す。

エリアーナは、権威や命令でなく、心から寄り添うことで、ジャンのエリアーナ付従者の心を取り戻させる。そのことが、アーヴィン王子にマルドゥラ国とサウズリンドの非戦を改めて考えさせている。エリアーナの公平な心は、オーデイン公爵を前にしても変わらない。命を狙ったその張本人である公爵が、娘のファミアが王子クリストファーの籠絡に失敗したと知って、思わず拳を振り上げたときに、ファミアを庇って立ち向かい、その暴力を非難する強さを持つ。父親に乗じてなんとかクリストファーに振り向いてもらいたかったファミアの迷惑など、このエリアーナの姿と対比されれば、女の闘いとしても勝負にならないことが示されていく。

「虫かぶり姫」は、七巻目において、このクーデターの事後処理に奔走される姿と王弟テオドルをめぐって新たな事件が想定されるところで終わっているが、王妃の兄によるクーデターだけに、王がクリストファーへの譲位を考えていること、エリアーナが見せた今回の手腕により、王太子婚約者というだけではなく、国の最重要人物として、王家から近衛や影を含む最高の身辺警護がつき、また、アレクセイなど、王太子側近たちの目から見ても、単なる高位貴族の令嬢という枠を越えた王妃の風格を備える女性として開花している姿に見え、クリストファーでさえがまぶしいと思うように成

長している。アーヴィン王子がクリストファー王太子を揺さぶる好敵手として仲良く争いながら外交を繰り返す姿も、緊迫した作品世界後の喜劇として一服の価値を持っている。

「虫かぶり姫」は「乙女ゲーム」や「転生」などという攻略本的設定を用いることなく、ヨーロッパ的王朝ファンタジーのような世界観の中で、「悪役令嬢」や「聖女」の型を使いながら、実は、現代社会の実相と進んでほしい理想的な社会像を紡いでいる。この作品はコミックだけではなくアニメ化も進んでいる。いつまで続くか、どこまで描かれるかは不明だが、一定以上の読者に支持されていると考えられる。

四、異世界から聖女が来るようなので邪魔者は消えようと思います——悪役令嬢と聖女か、聖女がふたりか——

この作品も順調に巻数を増やしていて、現在五巻、まだ続きそうである。この作品は『最果ての聖女』私は異世界で恋をする』というゲームを現代日本でやっていた少女のひとりが「転生したフェリシア」（以後このフェリシアを通常の主人公「フェリシア」として扱い、ゲームの世界や悪役令嬢としてのフェリシアについては、括弧などで区別する。また、タイトルについても長すぎるので、以降は「異世界から聖女」と簡略に表記する）である。フェリシアには、ゲームの記憶がある。

すなわち、この作品は、典型的なゲームの世界に転生した「悪役令嬢もの」で「聖女もの」である。そのゲームとは、『最果ての聖女』私は異世界で恋をする』であり、「悪役令嬢フェリシア」の迎える結末は、「ベストエンド」で暗殺、「ノーマルエンド」で毒殺、「バッドエンド」で刺殺というものであり、いずれにしても悪役令

嬢にとつては、過酷極まりないストーリーを持つ。そして、ヒロインによる王太子攻略に必要な「イベント」として「聖女召喚日の夜会で王太子と踊る」ことに続き、「湖で聖女と王太子がボートを楽しむ」こと、最後に「聖女のお忍びの際に魔物に出会い、王太子がそれを救済、聖女と結ばれる」のだが、悪役令嬢である「ゲーム内のフェリシア」は、それを阻止するために徹底して聖女にいじめを駆使し、それが故に前述のような過酷な死が待っているというストーリーである。この場合、ゲームの世界は、平民である聖女の「瘴気を浄化する」という能力により、王家から保護され、王太子に愛されるというシンデレラストーリーがゲームの肝であって、「ゲームのフェリシア」ごときは無用というのが、ゲーム設定の世界観である。

シャンゼル王国のウイリアム王太子が聖女に心惹かれた場合、暗殺か毒殺か刺殺しかないと知ったフェリシアが、「円満な婚約破棄」と「平民」として幸せに暮らそうと考えるところから始まる。しかし、すでにフェリシアそのものが転生者であり、幼少期は自覚なく過ごしていたとしてもおそらく人格が異なっていた。「ゲームのフェリシア」は、薬草や毒草に興味がなかったようだが、フェリシアは、義姉ブリジッドに毒を盛られて死にかけてから、毒に耐性を付け、積極的に毒草や薬草について学び、側室だった母とつながりのあったダレンと親しくなり、自分で調合した毒消し薬を用いて苦しんでいた鷹を助け、その野生の鷹と意思疎通し、王女と言うには劣悪な環境に育ちながら、それを意に介さず、前向きにたくましく生き延びていく。自分ひとりだけが側室の子であるため、義兄や義姉妹にも憎まれていると思ひ込み、ひたすら、前向きに生き延びて、庶民として暮らせるように生活する。従って、か

なり幼いうちから栽培した薬草を持って町の市へ売りに行くことも実行している。厳しい環境下で独立心と自立心を養ったと言える。しかし、それを見守っている義兄の存在があったとは知らないまま育つ。

また、ひたむきに不幸な環境下で生きてきた故に、覚えていても不都合だと思われるものは忘れて生活していた。その最たるものは、シャンゼルの王太子が、幼い頃グランカルストに来て、フェリシアと会ってある約束をしたことだった。シャンゼルの王太子ウイリアムは、そのひたむきで、生きることを植物を通して理解し、生き生きと人間らしく輝いている姿に感動し、心惹かれて、フェリシアを連れ出す約束の言葉を残してシャンゼルに帰国する。ウイリアムも幼くして唯一の後継王太子として笑顔を貼り付けた処世術を身につけ、人を迂闊に信じられない孤独に苦しんできたからである。

従って、ゲームの設定にはなかった前提が生まれた上で、王となったアイゼンによって婚約が整えられ、フェリシアはシャンゼルの送り返される。フェリシアは、ウイリアムの姿絵を見て転生前のゲームの記憶とそのゲームに夢中になっていた妹のことを思い出し、そのゲームの攻略状況を把握しながら自分の目標である「円満な婚約破棄」と「平民」として暮らす準備に邁進する。

フェリシアがシャンゼルに到着した日は、新しい聖女の召喚日も重なるが、多くが聖女の方へ気をとられる中で、ウイリアムは、きつちりとフェリシアを出迎える。自分が現代日本からの転生者の自覚があるフェリシアは、王家に生まれていながら、全く権威主義ではない。サラという聖女も日本の高校生であったものが召喚されたと理解し、そのすごさに素直に敬意を払う。従って、聖女であるサラから慕われ、他からどんな嫌がらせを受けても、サラとフェリ

シアは敵対しない。さらに周辺の貴族令嬢たちのいじめや嫌がらせにも全く動じずに流してしまふ。つまり、グランカルスト王国での不幸な暮らしを逆手にとって暮らしてきたフェリシアには、かえって環境も良く、快適に暮らせることになる。

ダレンに連絡して身をやつし、王宮を抜け出すフェリシアだが、早速ウィリアムに気づかれる。ウィリアムも一介の騎士に身をやつし、お互いに「騎士のウィル」、「薬師見習いのエマ」として、つきあいが始まる。フェリシアはダレンのところでは、素の状態に戻れるので、二人はここで知らず知らずに親しくなり、フェリシアの方も認めたくないものの恋心が芽生えるようになる。サラとウィリアムの状況を探りつつも、フェリシアは、婚約破棄を切り出す覚悟をする。

ここで計算外なのは、割と気楽に視察に来るグランカルストの王、義兄であるアイゼンである。なぜか、アイゼンとウィリアムは互いに認め合っており、仲良く喧嘩をする仲である。フェリシアは気楽に視察に現れるアイゼンにも振り回され、アイゼンにフェリシアがウィリアムに惚れたことを指摘されて苦悶する。アイゼンは、前王が候補に決めていたテオドルにはなく、フェリシアの幸せを考えて、ウィリアムからの真摯な求婚を受け入れてシャンゼル王国へ出すと決めたその人であるが、もちろん、フェリシアは、そんなことは知らない。

ウィリアムとの最後の晩餐時も二人だけの願いが叶わず、聖女も交えた中で婚約破棄を切り出し、最後に出されたデザートに仕込まれた毒で倒れる。

ここまでは、ゲームの設定と多くは異なるのであるが、決定的に違うのは、もともとウィリアムが幼少時にフェリシアに恋し

て、努力して国力をつけながら、アイゼンと交渉して婚約に至っていること、聖女サラは、フェリシアに親近感を抱きこそすれ、敵意はまったくなく、しかも護衛騎士フレデリクに恋をしており、ウィリアムにも、そのことは見抜かれていること、さらにイベントを点検すると、「召喚の日の夜会」は、王に促されてウィリアムとダンスをしているが、他の男性たちとも踊っていること、「湖でポートの相手がフレデリクであること、「聖女のお忍び」の時の聖女は、身をやつしていたエマとしてのフェリシアを頼り、魔物が出たときに駆けつけたウィリアムは、エマの正体がフェリシアであることをはじめから知っていて、フェリシアを救済するために駆けつけている。また、その前に魔物からフェリシアを庇って怪我をするのがアイゼンであることも「ゲームのフェリシア」の無用ぶりとは異なる愛されようなのである。残念ながら、気づかないのは本人のみであり、それだけ前世の知識であるゲームの設定が強迫観念になっていることも考えられるし、実際にフェリシアが記憶している「イベント」は、現実の補正が入りながらも起こっている。

現実が発生したフェリシア毒殺未遂事件は、当時の財務大臣・アンヴェル伯爵が、自分の娘を王太子妃にしたい野心を持ち、ゲイルやレベッカを使って謀られたことが分かる。ウィリアムの必死な態度、聖女サラの犯人の口実に利用された怒りと悲しみで、事件はアンヴェル伯爵家の没落で幕を下ろす。ウィリアムは、次の火種を察知して、それを表舞台に引きずり出す準備も怠らない。

無事に回復したフェリシアはウィリアムと徐々に心を通わせ、ウィリアムのために浄化薬の開発に乗り出していく。聖女は空気中の瘴気は浄化できるが、動物に取り憑いて魔物になってしまったものには効果がない。そのことで、この国は常に苦しめられていた。

フェリシアは、これまでの実験から、野生の鷹ゼンにのませた薬がこの国で発生する魔物に効果があることに気がつく。ウィリアムは、フェリシアが聖女以上の存在である可能性に気がつき、それを貴族社会や国民にどのように知らしめるか思案する。また、フェリシアの虐げられた育ちを理解して、自分を頼ってくれるように仕向けようとする。フェリシアは、ウィリアムのわかり難い愛情の示し方と、彼の王太子としての仮面と本心の違いを少しずつ見分けられるようになって行く。薬品開発では、ドミニク博士やダレンたちとチームを組み、暗殺未遂事件後、フェリシアの毒好きを気に入って、王太子に忠誠を誓ったゲイルやアイゼンから遣わされたテオドールも作品世界で重要な役割を担っていく。

ウィリアムは、常々フェリシアを幼少期に毒殺しようとした異母姉、ブリジットへの報復を企み、情報収集を続けていた。実は、ブリジットをグランカルストから出してオルデノワ国の国王に嫁がせたのはアイゼンであり、アイゼンにとっては、フェリシアを守るための縁談であったことをウィリアムは承知していた。ウィリアムは、ゲイルから決定的な情報を得、本国とオルデノワ国の双方での決着を目指す。ただ、時を同じくして魔物の浄化に効く決定的な植物が、オルデノワ王国にのみ生息する「ルアル草」であることが、テオドールの助力によって判明する。ウィリアムは、フェリシアのトラウマまで理解して、オルデノワ行きを渋り続けるが、フェリシアは、義姉との決着を覚悟する。ウィリアムは、長年情報収集していた内容と、立太子のパーティの最中に堂々とフェリシア毒殺を仕掛けてきたブリジットに怒り、フェリシアを庇って対峙する。ルアル草を入手するために奔走する一行の前に瘴気に憑かれたブリジットが現れる。機転を利かして、ルアル草から一錠だけ薬を調査して

ウィリアムの元へ戻るが、ここで、魔物からフェリシアを庇って倒れるのはウィリアムになる。フェリシアは、人生で最大の怒りをブリジットにぶつけ、怪我を堪えて立ち上がったウィリアムに浄化される。実は、ウィリアムはこのブリジットとアンヴェイル伯爵私生児・ガエルが組んで、シャンゼルに魔物を仕掛けてくるという情報を入手していた。ウィリアムは、フレデリク・アーデンに外遊中の指揮権を委譲し、留守中に起こる事件の対処法を宰相ゴードン、フレデリク、聖女サラに授けて出かけていた。シャンゼル王太子であるウィリアムは、この一連のブリジットが起こした事件を外交カードに、自国に有利な協定をいくつか結び、ブリジットを療養という名の幽閉に持ち込んでフェリシアの敵を討つ。

フェリシアの調査した浄化薬は、人々や王家に希望を与える一方、教会の敵視するところとなるが、ウィリアムは再びアイゼンを呼び出して煙に巻き、浄化薬の改善に着手する。その頃、動物に瘴気がついて魔物となる事例から進んで、ブリジットに始まり、ウィリアムの母・シャンゼル王妃など人物が瘴気に憑かれる現象が頻発するようになる。

徐々にその大元が解明されるが、彼は、アルフィアスという年齢不詳の男である。ウィリアムの教育係であって、ウィリアムを人形のように動かせるよう教育し、両親である国王夫妻を毒殺させようとした人物である。自身が毒菓子を食べただけでなく、全幅の信頼を裏切られた点で、ウィリアムの心に深い傷を負わせていた。そういう傷を負ったウィリアムにとって、グランクラストの離宮で会ったフェリシアのまっすぐで明るい強さだけが信頼できるものに映った。ウィリアムの現実には、アルフィアスの裏切り後、王太子として厳しく接する両親（国王夫妻）でも、大臣以下の側近たちでも

なく、フェリシアを得たいという執着から小国ながら優秀な王太子に成長したことが分かってくる。しかも、ウイリアムとの心のすれ違いに乗じて、アルフィアスは、フェリシアにも接近して信頼を得る。アルフィアスは、人形王子す前だったウイリアムに執着し、世の中を自分の意のままに操るために、人々をそれぞれの絶望に落とそうと企んでいく。

ゲイルが実は教会側のスパイと知って、ウイリアムはそのままゲイルを泳がせることにする。その方が教会という国を超えた存在の情報が入るからである。その中でアルフィアスは実は教皇であったという事実が出てくる。ウイリアムはフェリシアとの結婚を機にその祝宴期間も違法薬物等摘発の囮となつて、社交界を渡り歩き、裏で物証を集めていくが、これの背後に在るのも教会であった。

アルフィアスは、どれだけ生きていくか分からない瘴気そのもののような男のことである。フェリシアにも瘴気をつけようとするが、かかったフェリシアは、転生前の世界との狭間のガラス張りのような空間に囚われる。ウイリアムが危機に陥るのをみて、渾身の力を込めてウイリアムを助けようとするが、その時、聖女召喚の時と同じ光の柱が現れるのである。つまり、サラが現代日本から召喚された聖女であるなら、同じく現代日本から転生したフェリシアも、ゲーム上は悪役令嬢の役割であったかも知れないが、資質としては、瘴気を寄せ付けない「聖女」の資質を持つことになる。とうとうアルフィアスは、教会勢力を使ってサラを誘拐し、もう一度、ウイリアムを自分の人形に仕立て直そうと企む。王妃を使って、フェリシアを排除しようと目論んだが、失敗し、難しい関係だったシャンゼル王家の親子関係もフェリシアが絡んで改善されていく。

聖女サラと仲良くなって、協力出来るようになると呪文が日本語

であることを知り、フェリシアは、サラに転生者であることを明かして日本語でやりとりするようになる。当然、ウイリアムたちからは、呪文をやりとりしているように見える。ウイリアムは、この事実には気づいてから、召喚されたサラと同じように、フェリシアも自分から去るときが来るのかも知れないという不安を抱く。しかし、フレデリクには、聖女サラと末永く幸せになるように促している。

聖女サラの奪還作戦に参加したフェリシアは、アルフィアスが、周辺に瘴気を漲らせ、人にどんな瘴気をつけて狂わせていき、聖女でも手に負えなくなる。フェリシアは、知恵を絞って聖女に近づき、サラと同じ腕輪を持って二人で呪文を唱えて浄化する。さしものアルフィアス自身が浄化されて消えて行く運命を辿る。つまり、瘴気とは、人間の持つ負のオーラの集合体のようなもので、それが人化したものがアルフィアスであったと言える。

国民が熱狂するほど、瘴気からの解放は、国民を歓喜させ、サラやフェリシアの人氣は高まった。一方、ウイリアムは、フェリシアを失うかも知れない不安から、寂しげな顔を見せる。ウイリアムの表情を読むことに長けてきたフェリシアは、すべてをウイリアムに話す決心をし、自分が「転生者」であることを告げる。しかしまた、辛い日常に忘れていたとはいえ、幼い日にウイリアムに会った自分も今の自分に連なることを話し、自分は聖女のような召喚によつて来た者ではなく、どこにも行かないとウイリアムに告げて安堵させている。

フェリシアは、すべてに前向きで恨みを持たずにその先を越えていける女性であるからこそ、味方も増えて、シャンゼル国を瘴気から解放することが出来た。ゲームのシナリオを越えてウイリアムと力を合わせて王国を治めていける土台を築いた話に変質させている。

五、弱気マックス令嬢なのに辣腕婚約者様の賭けに乗ってしまつた

こちらは典型的な男爵令嬢がヒロインの「キャロラインと虹色の魔法菓子」というゲームのモブキャラ悪役令嬢のピアに転生してしまつたことに、幼少期に気づいてからのピアの物語になる(以後、ゲーム名は作品内の略称と同様に「マジキャロ」作品本体は「弱気マックス令嬢」と略す)。このゲームは、攻略対象の婚約者が、すべて悪役令嬢として断罪され、国外追放になるというストーリーであり、断罪の急先鋒が切れ者のルーファスになるというものである。

王家の仲介で政治的に考えられたルーファスとの婚約だったが、ある日突然、「マジキャロ」の内容を思い出したピアは、真つ青になつて倒れ、幼いながらも自力で婚約破棄を希望する。ルーファスも、幼いながらその理由をきちんと聴きとり、王命にすら逆らつて婚約破棄することの不利を心配する。そこでピアからいろいろ聞き出したルーファスは、こちらも本当に十歳前後の子どもかと思うほど子どもらしくない子どもだが、「予言を口に出来ること」「化石という新しい概念を持つていること」、そして何よりも、「将来自分の慕うルーファスから冷たく断罪されることへの深い悲しみを示されたこと」で、逆にルーファスが「ピアから得られる愛情」に気がつき、自分の意志で婚約を続投することを提案し、さらに子どもらしくないことには、ピアがそれを契約書にまとめるように言い、二人は幼くして、自分たちの意志で婚約に関する契約を取り決めた。その中に二人の将来についての「賭け」が入っていて、この二人は、この後ずっと二人だけの「賭け」を楽しみつつ、一緒に育っていく。また、スタン侯爵家もピアの地質学に関する能力を大切に守り育て、早くから領地での採掘も許可している。ピアは、そうとは

知らずに地質学の測量等で得た知見を地図に書き込み、領地運営に貢献する。いつの間にかピアは、前世での研究を今世で生かすことによって、国の宝に育っていく。ただし、ピアは、この刷り込まれたストーリーで悪夢を見るせい、自己肯定力が低く、研究熱心ではあるが、それがどのように周囲に貢献しているかについては、一向に気がつかない。ロックウエル家そのものがお人好しで研究そのものにしか興味がないのに気がついたルーファスは、ピアだけでなく、ロックウエル家全体を懐に入れて守り、研究成果やアイデアを金銭価値へ変えていく。

ピアも断罪されたときの可能性を考えて、蓄財には、それなりに熱心だが、キャロラインに籠絡されて攻撃的になるヘンリーの姿を見て悲しむエリンの姿を見ていられず、ヘンリーには、度々肉を餌付けして、マジックパウダー中毒を緩和するように努めている。

ゲームを元にした悪役令嬢ものでありながら、ここでは、攻略対象の男性のパートナーがすべて悪役令嬢である。最も悪役令嬢らしいのは、「キース公爵令嬢」であろうが、「ピア」も「ホワイト伯爵令嬢エリン」も「ルッツ子爵令嬢のアンジェラ」もニコルソン侯爵実弟の婚約者「シエリー先生」も皆等しく悪役令嬢としてキャロライン・ラムゼー男爵令嬢の攻撃対象になる。ピアは、キャロラインの言動から彼女も転生者だと知り、ルーファスの協力によって、一人守られるが、他の全員も国外追放にならないようにルーファスと協力して対応していく。

ルーファスは宰相補佐であり、攻略対象の中で一番の切れ者である。その切れ者がキャロラインに引かからないどころか、相手にもされないのが、ゲームのシナリオという名の運命は動くのだが、かなりいびつで、キャロライン言うところの「ルーファスルートは

バグっている」状態になる。しかも、ここはゲームの世界ではなく、現実の世界である。キャロラインを好きになるマジックスイーツというクッキーは、この世界では未知の毒であり、どうやら隣国メリークが仕掛けたものだとは判明するに至る。

ゲームのストーリーより前倒しされた断罪劇で婚約者たちの代わりにルーファスが国外追放を言い渡されるが、とうとう国王が出てきて、王太子やキャロラインを捕らえ、事態を収拾する。

ピアは、ルーファスも狙われていたので、なんとか毒の正体を突き止めようと奮戦する。キャロラインも白衣を着たピアの純粋な態度に気を許す。おそらく背後には、ともにこのゲームをやっていた日本人から転生したという背景があるからだろう。

ピアは、国王の忍びの姿であるジョニーおじさんが差し入れてくれていた「パティスリー・フジ」の「フジ」という名前が気になってそのお菓子屋に顔を出す。そこで平民の転生者カイルと出会う。カイルをルーファスに引き合わせ、協力者に引き込む。また一方で、面会許可の下りたキャロラインとの接見で、カイルの店のどら焼き風な菓子を渡し、前世の記憶も持つキャロラインから有益な情報を引き出す。また、キャロラインは単なるコマで、マジックスイーツへの中毒症状で復帰に苦労している攻略対象の姿を知って愕然とする。さらにフィリップ王太子が弟に王太子を譲って、生死の狭間で療養する羽目になっていることも心を痛める。フィリップとキャロラインの間には、親愛の情が育っていた。また、キャロラインも平民に生まれ、ラムゼー男爵が人捜しをしているときに自分が養女になることが分かっており、それしか生きる術のないことも分かっていたという。貴族階級に生まれることと平民に生まれることとの生活の差がありありと描かれていて、ピアは、キャロラインを

恐れていたにもかかわらず、憎むことは出来なかった。キャロラインを取り巻く現実の厳しさとゲームのつもりで利用されたキャロラインが哀れに思えたからだと考えられる。

ルーファスが全面的なサポートに入り、現実世界は苦勞が絶えない。そして、国の信頼厚い医療師団長が実はメリーク帝国のスパイである疑惑に行き当たると。それは、子息ジェレミーの婚約者だったアンジェラ・ルッツ子爵令嬢がピアに接近することで、高位貴族が知らないジェレミーの姿、「あの無邪気さは絶対計算です」という一言と、一人だけ回復しないフィリップ王子に対するラグナ学長の疑念、そこへ決して諦めずに面会を申し込むルーファスの努力で、毒出しどころか、別の毒を仕込まれて、死へ向かっていることが明らかになる。ルーファスたちは一芝居打って、フィリップのためにささやかな音楽会を開き、音に対する研究で先端を行くピアの兄をも巻き込んでジェレミーから、決定打を掴んで拘束し、そのまま何も知らせないうちにローレン医療師団長を拘束して徹底的に調べ上げることで、かなり長いことメリークのスパイで、アージュベール王国の人材を秘密裏に葬っていたことが明らかになってくる。ルーファスの父、宰相であるスタン侯爵もローレンの毒で倒れたことが明白となり、スタン家が、王家とは別にクリス医師を専属で抱えていたことから助かったことも明らかになる。

ピアがローレンやベアードにちやほやされるのが好きな王妃の不興を買ってしまう。ルーファスに一目惚れしたバスマの第二王女から貴重な黒真珠を賄賂してもらった王妃は、勝手に新婚のルーファスたちを別れさせようとして、宰相家をあげた苦情が国王の下に届けられる。ジョン王も、あまりに気まぐれで国益を考えない王妃に業を煮やし、島にある離宮に幽閉を決めて、スタン家やロック

ウエル家に報いる。パスマの王女も、わがままで自分勝手な王女に容赦のない厳しく冷たい姿を見せるルーファスに驚き、ロックウエル家へ乗り込んだことで治水事業の進んだ姿に、王族としての使命を思い出す。このときもピアが、王女を許し、受け入れることで円満に解決している。

ルーファスはフィリップを助け、フィリップはピアの提案を採用し、王族として国中を回ることで、国家の役に立とうと考える。そして、その第一番目に訪れたのは、ロックウエル領だった。王家とロックウエル家の間には、過去の因縁があり、領地替えや襲撃に遭いながらも、領民と共に移住先の地で、手作りの領政で手堅く治めている。そこにフィリップが王家側の使者としてきちんと挨拶に現れた。また、その地には、ベアード一派に襲撃されて傷を負ったキャララインが、修道院から出され、リハビリティを兼ねて預けられていた。

ルッツ子爵家の次女マレーナと引き換えにピアを拉致してメリークへ抜けようとしたマリウスから、ルーファスがスタン領でピアを奪還したが、そのピアにキャララインを見てくるようにと命じて帰す。ルーファスは、フィリップにも、キャララインにも新しい道を歩かせ、ピアをそこに配しながらも、ピアの拉致後の元氣な姿を家族に見せる意図も含めて送り込んでいる。ルーファスのさまざまな気配りの効いた場が用意される。

この作品世界は、単純なゲームの世界ではない、国と国との見えない戦争、スパイや内通者、裏切り者などおおよそゲームの世界とは全く違う重い課題を背負って生きる人々の姿が描かれる。この作品のすごいところは、この転生者たちは、皆、ある日あるとき同一のコンビニにいた者たちだ。つまり、前世のある日、日本のとある

コンビニにいた者たちである。カイルはコンビニ店員、キャララインとピアが殺された客、そしてマリウス・ベアードが殺人犯だったという因縁があることが分かる。つまりは、ゲームの世界だろうが、現実生活だろうが、因果応報な展開でゲームの世界の現実がさらに現実味を増す。そしてその話は、カイルとは話し合えても、ルーファスには言えない話であるはずだ。

ゲームの展開方法、つまり攻略本の内容を知っていることが、自分の人生を有利にするだろうか。そうとも言えないであろう。確かにピアは、その内容を差し障りのない範囲で語ることによって、守られたり、共同で立ち向かったり出来た。しかし、ピアの内側に一人心に留めて苦しむ重さもある。だからこそ、いつになってもひどくうなされる状況は改善されない。それでも、子供時代から見守り、うなされるピアに添い寝するルーファスがいる。そのささやかな幸せをこの作品は是としている。

この作品は、人は、ひとりではないというメッセージを内包している。支え合って、助け合って生きているのだと。人の価値など優劣がないこともこの身分・階級社会や実力主義の研究者の世界においても命の価値の優劣にはならないことをピアに語らせている。さらには、夫婦になったルーファスに、ピアは、夫婦は苦しみは半分、喜びは倍にできると告げて、ルーファスを精一杯支えている。ピアも寄り添い型のヒロインである。

六、まとめ

これらライトノベルは、さまざまなフォームを使うからなのか、時折、全く別の物語でも設定や登場人物のキャラクターが似てくることがある。例えば、「虫かぶり姫」のエリアーナと「異世界から

「聖女」のフェリシアを比較すると、面白い共通項が見えてくる。まずは、エリアーナにしろフェリシアにしろ、純粹無垢で恋愛初心者で、その分、恋愛的心情に疎い天然キャラクターであること。純粹な余り自分の発言や行動の意味することに気づかず、相手を翻弄することすらあるのが、魅力とも言える。また、「虫かぶり姫」と「弱気MAX令嬢」では、エリアーナもピアも、自分より、相手の心情や心のありように寄り添って、無自覚的に懐に入れてしまう魅力を持っている。

他のキャラクターでは、「虫かぶり姫」のジャン、「異世界から聖女」のゲイルは、ともに憎めない悪役で、女性主人公にも気に入られ、狂言回しのような役割も担う。しかし、現実には、二重スパイや裏切りなど本人たちの「軽み」とはおおよそ似つかわしくない「重たい現実」の中を駆け回った重苦しさをまもっている。「虫かぶり姫」の「アラン」も王太子に拾われるまでの現実は似たようなものだが、アランの方が、軽重の振り幅が穏やかなキャラクターのように考えられる。いずれにしても、ライトノベルを執筆するに当たって、キャラクター設定による読ませる魅力の一端を捕らえていることになるであろう。

ファンタジーであっても現代社会が抱えている問題を捉えている作品が、今日のライトノベルを支えていると考えられる。大量生産される作品の中で、読者が求める身分階級を超えた恋愛や、いじめや虐待を超えた思いやりなど、普遍的に人々が求めるものが、人気を得ている。

付記 引用した作品は、Kindle版のものを底本としている。

注1 拙稿「ライトノベルにおける物語の技法(二)——悪役令嬢の現実——」『歌子』第29号p71-28

注2 Amazonのレビューで星4つ以上のものから、筆者があらずじ等吟味の上、すべて読了して作成。

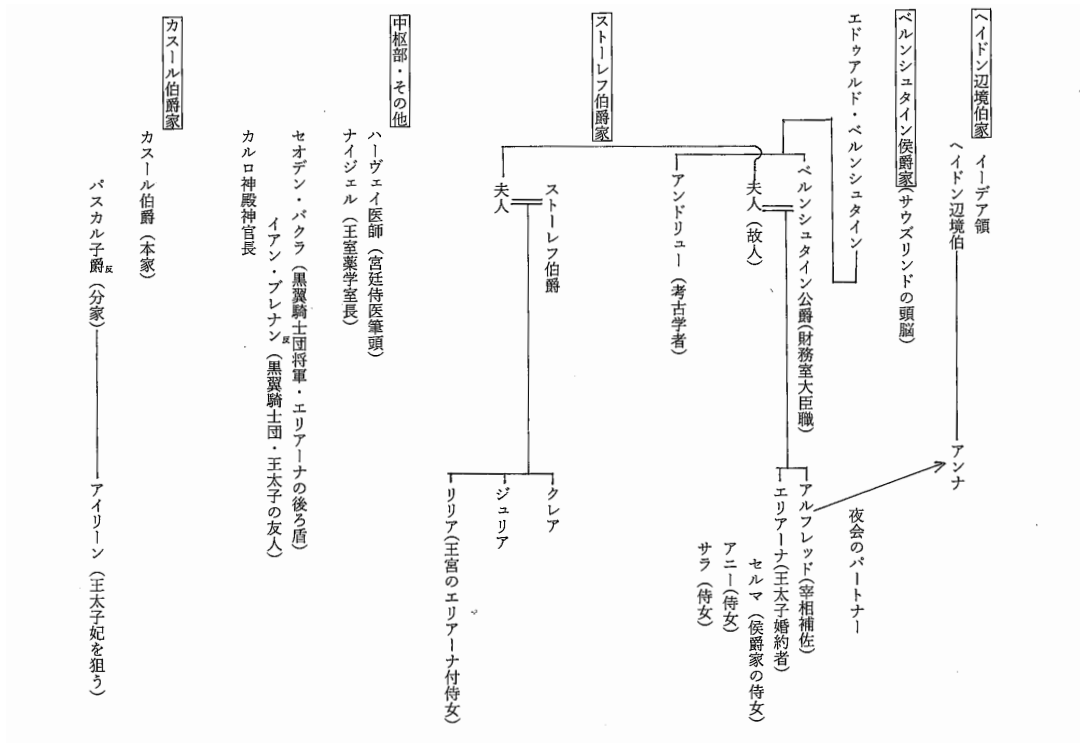
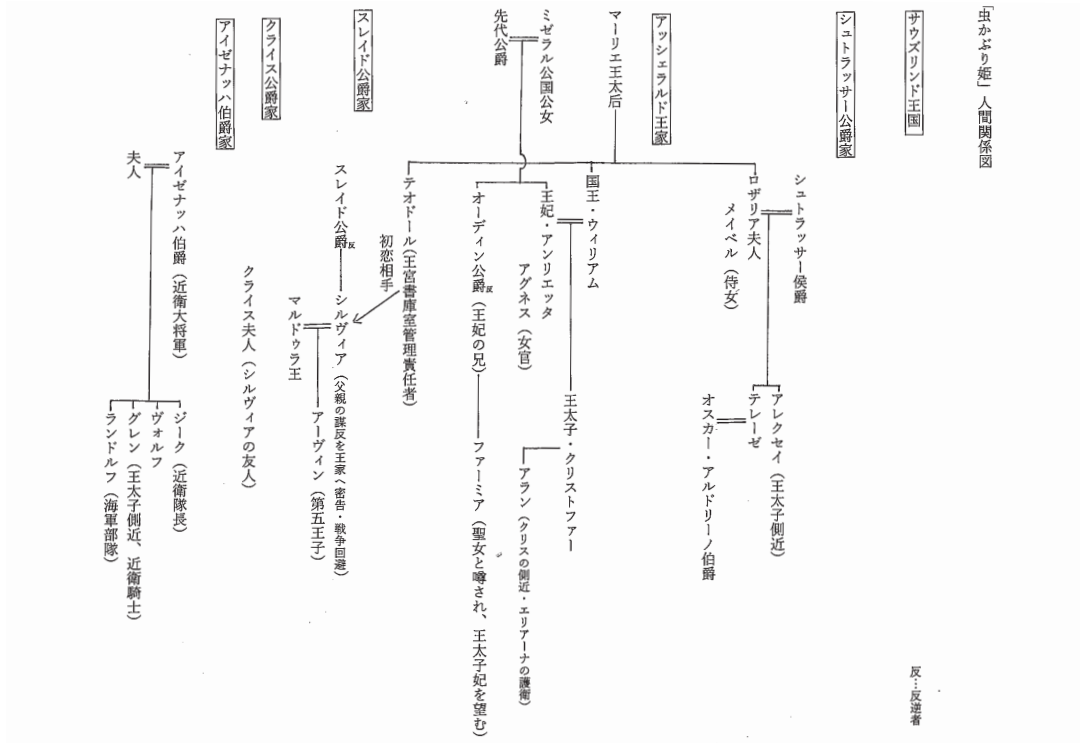
注3 前掲書「ライトノベルにおける物語の技法(二)」p26「侯爵令嬢の嗜み」人間関係図

注4 本稿「虫かぶり姫」人間関係図」参照

注5 本来ならば、「私」が現ベルンシュタイン侯爵でエリアーナの父を指しているはずなので、エリアーナの「祖父」は現侯爵の「父」でなければならぬはずだが、原文のまま引用した。

注6 本稿「異世界から聖女が来るようなので邪魔者は消えようと思います」人間関係図」参照

注7 本稿「弱気マックス令嬢なのに辣腕婚約者様の賭けに乗ってしまった」人間関係図」参照



ミルズ伯爵家 (トライス公爵家親戚)

ミルズ伯爵 — ソフィア (王太子妃を狙う)
「ロナ」 (ミルズ家の侍女)

ラルシエン伯爵家 (先々代伯爵バーナードは国王の叔父)

カール・ラルシエン伯爵
レイチエル夫人

ヘスター・パッサス (薬師・薬草研究者)

フアーネス・アルケミル博士 (薬草学権威) — シーン・アルマン (曾孫)

ウルマ 鉱山屋ハーシェ
ラッカ・アルクト (鉱山夫たちのリーダー)
ベルント

その他の貴族たち

トラレス伯爵 (オーデイン公爵派・ギーズ領)
ダウナー伯爵 (軍部強硬派) — ダウナー子爵夫人 — マティルダ (王太子の側室を狙う)
グランヴィール伯爵 (銀月の貴公子)
モーズリー男爵 (バース商会……武器商人)
レネック・オーエン男爵令息 (ヘイドン辺境伯令嬢 (横恋慕))
ギルハン伯爵
ブランド伯爵
エヴァン伯爵

ロマの人々

シスルの星 (学識者の一冊) — ニコラ・レッツイ博士

王家の影の離反者

ディルク・オフエン (王太子筆頭教育係・王家の影統帥)
ヴァトー (エリアーナ暗殺に情熱を傾ける)
ジャン (エリアーナ付、自分の意志でエリアーナの護衛に戻る)

マルドウラ国

マルドウラ国王

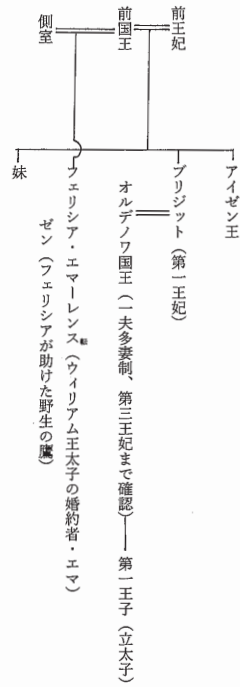
「レグリス・カランザ第二王子 (盲目・次期王と目される)」
ニーナ (星導師リムル人の末裔)
第三王子 (オーデイン公爵と内通)
「アーヴィン・オランザ第五王子」
レイ (アーヴィンの従者)
バルモア伯爵

ミゼラル公国

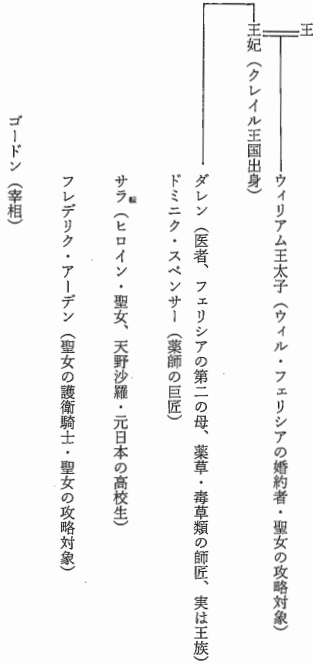
エフィンガム卿 (年配の大使・エリアーナに興味)
ミレーユ (ラモンド夫人・元クリスの婚約者候補・真珠姫)
シャロン・ガードウェン (ミレーユを姉のように慕う令嬢)
エレン・ウェンハム (女騎士)

「異世界から聖女が来るようなので邪魔者は消えようと思います」人間関係図

グランカレスト王国



シヤンゼル王国 (大陸最東端、魔物と瘴気の国)



- ライラ (ウィリアム派遣のフェリシア付女性騎士)
- レベッカ (侍女・フェリシア毒殺に加担)
- ジェシカ・トールマン (男爵令嬢・フェリシアの侍女)
- ゲイル・グラデイス (毒味役・暗殺者・教会との二重スパイ)

アンヴァイル伯爵 (前財務大臣・フェリシア毒殺を指示) — 「ガエル (私生児・宰相補佐) 娘 (王太子妃を狙う)」

教会

- ナプス男爵 (内務省の高官・教会と内通、違法植物の栽培と人身売買)
- ワイマール侯爵
- ブレデル伯爵

アルファイス (ウィリアムの教育係、実は教皇・瘴気そのもの)

クレイル王国

- コリンズ侯爵ウォルド
- イングラム公爵ジュームズ (王弟、シヤンゼル王国王妃の弟)

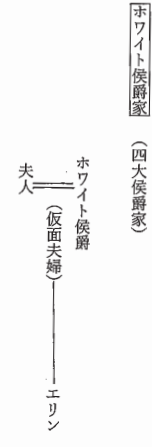
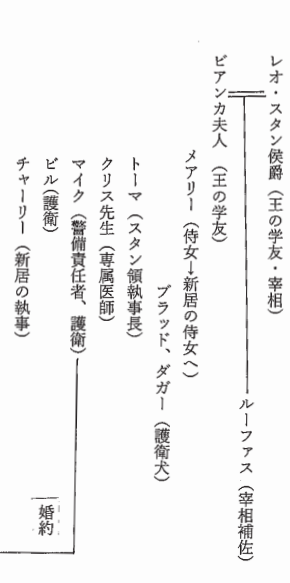
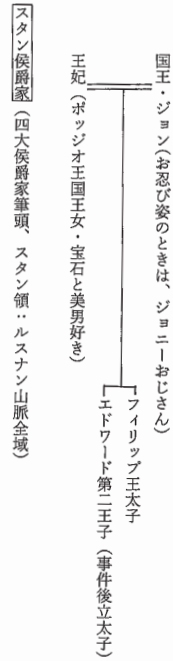
ロザリー (ウィリアムの側室狙い、悪役令嬢?)

現代日本

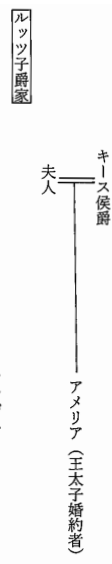
前世のフェリシア
「妹 (最果ての聖女) 私は異世界で恋をする」ゲームを繰り返し、攻略

「弱気MAX令嬢なのに辣腕婚約者様の賭けに乗ってしまった」人間関係図

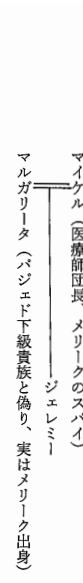
転……転生者



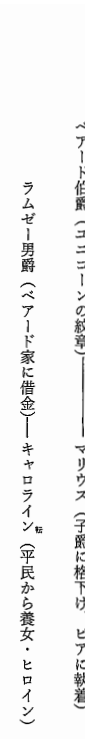
キース侯爵家(四大侯爵家)



ローレン子爵家



ベアード伯爵家(スタン侯爵家の政敵)



その他

